

みじみ思いながらみんなとさよならをしてきました。

教育プログラムは本当に時間もかかり、また教育だけやっていたらいい、というものでないで大変です。しかし、今までの積み重ねが、一生懸命働いている「ワグ」たちを育てたのだ、という事実は私たちとしても共に喜ぶことだと思います。みなさん、いつか一緒に現地の人びとに会いに行きましょう。そして、「日本」が常識ではないこと、様々な状況にある人々とどんな形でいい関係をつくっていかうか、ということなど、考えていきましょう。

国際協力フェスティバル2003に参加して

高井 みどり

10月4、5日、日比谷公園で行われたこのイベントに参加しました。両日ともに晴天に恵まれ、多くの人々で賑わいました。日頃から NGO や NPO への関心はあったものの、働き続けてきた私にとって、活動する時間的余裕もなく FOT の会員として資金援助をするのみで、これではいけないのだと思い続けてきました。しかしこの度ご縁があり「ピラーンの医療と自立を支える会」に入らせていただき、更にこのフェスティバルにも参加するようになりました。今まで何もしないで外から眺めていただけの時と違い、この参加体験は今後の自分自身のことを考えていく上で大変意義のある体験だったと感じています。

1967年（昭和42年）政府による第1回目の青年海外協力隊が東南アジア等に派遣されました。友人がマレーシアのクアラルンプールに派遣されたことで私も大いに関心を持ちました。その2年前（1965年・昭和40年）には、市民運動として全国的な高揚を見せた「ベ平連」の結成などもありました。しかし、活動そのものはあったものの「ボランティア」という言葉はなく、まして NGO、NPO などの市民団体としての国際的活動もありませんでした。その頃、私は学生で、東京の山谷の子どもたちに勉強や絵を教えていました。

そんなわけで、公園内の様子は、私にとって隔世の感有り、若い人たちの生き生きとした姿が印象的でした。団体ごとにテントが張られ、その中で思い思いの物を売り、また活動紹介などがなされていました。私達は、木漏れ日の下のテントでティラナク織やビーズ製品を販売しました。発展途上国における貧困、飢餓、環境悪化、南北経済格差等に対して、民間の立場から手を差しのべるという共通の目的意識に支えられた連帯感はいいものだなあと感じました。

2日目、小ホールで行われた HANDS 主催の「教えて！子ども参加の取り入れ方」というテーマの1時間のワークショップにも参加しました。ユニセフ、国際子ども権利センターのスタッフの方から話を伺い、私た



小ホールでのワークショップ

ちの今後の活動への助言を頂きました。ユニセフの方の話も大変参考になりました。また山崎さん、九島さん、森田さんの現地に行ったり、研修会に参加した人からでないといけない内容が興味深いものでした。

今回のイベントを通して私は自分自身が楽しみながら活動できたとと言えるでしょう。また、新しい方々と知り合えたことにより、様々な情報や知識を得ることが出来たとも言えます。これからも時々参加したいと思います。

フェスティバルの運営は大変組織化され整然と行われ、定刻に始まり定刻に終わりました。ゴミは分別収集され、会場には塵ひとつありませんでした。さすがに環境問題にも取り組む団体のフェスティバルでした。

千代紙人形を大事に胸に抱える子どもたち

2001年5月北海道新聞に載ったミアソン寮建設に関する記事を見て連絡をくださった旭川市在住の松長秀雄さんご夫妻が、少数民族の子どもたちにと平和への祈りをこめて、千代紙人形を作ってくださいています。体力的に海外旅行ができずご自分で渡したいけれどできないのと、送ってくださり、現地出張の際子どもたちに渡してきます。今回で4回目です。写真はバサグ・ノフォックのモスンプロジェクトで学ぶチボリ族の子どもたちです。

